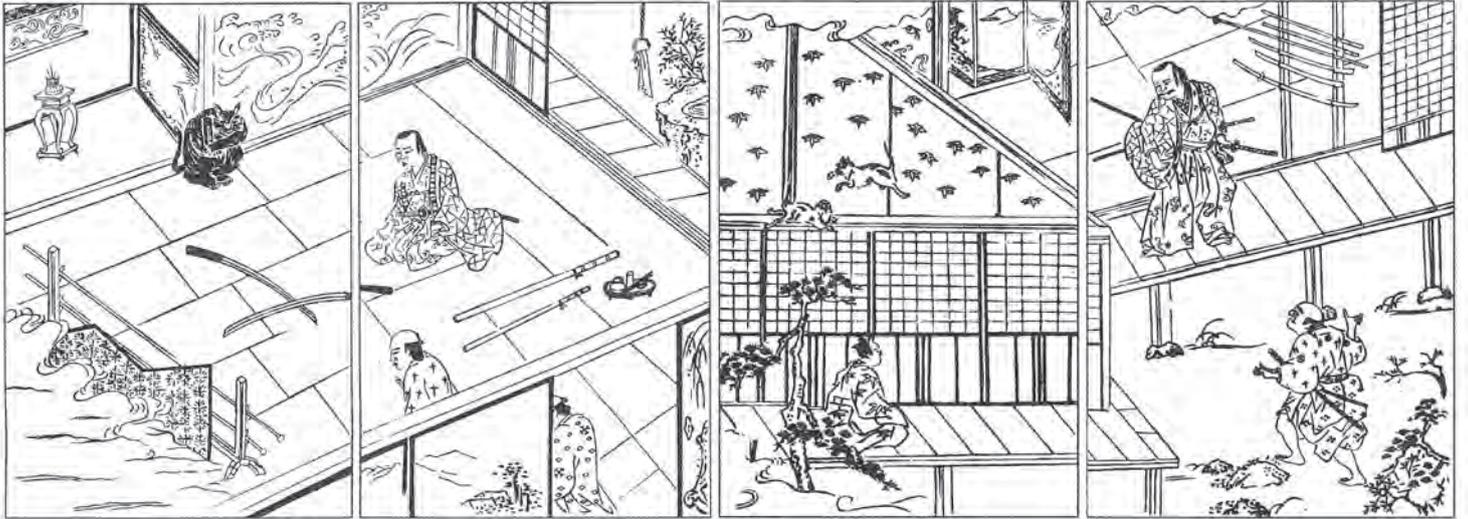


現在も読み継がれる 剣術の秘伝書の作者

佚齋樗山



『田舎荘子』の「猫之妙術」から

武道を嗜む方に現在でも読み継がれている江戸時代の書物、『天狗藝術論』と『猫之妙術』(『田舎荘子』所収)は、江戸時代中期に、下総国関宿藩の久世家に仕えた佚齋樗山(1659年〜1741年)が書き著したものです。「猫之妙術」が収められた『田舎荘子』は、滑稽さの中に教訓と風刺を交えて流行した「談義本」の祖とされ、江戸文学に大きな功績を残しました。

江戸時代中期に、きわめて江戸的な新しい小説の興隆がありました。その中の一つに、談義本という小説ジャンルがあります。

談義本は、風刺的な語り口や親しみやすい滑稽な語り口の中にも貴重な教訓を含んでいる読み物で、寛政の改革で弾圧されるまで流行しました。

その談義本の口火を切ったうちの一冊である『田舎荘子』は、関宿藩の久世家に仕えていた佚齋樗山が執筆しました。

樗山は、万治2(1659)年に江戸で生まれました。本名を丹羽十郎右衛門忠明にわじゅうろうえもんただあきといい、父定信の代から久世家に仕え、関宿藩旗奉行の300石取りでした。

父の跡目を継いだ忠明は、藩主の広之、重之、暉之の久世3代にわたって仕えました。

享保12(1727)年、忠明が69歳の時、『田舎荘子』を江戸で刊行しました。その筆名(ペンネーム)が佚齋樗山でした。

『田舎荘子』は、中国の荘子の思想や説話を参考にして著した談義本です。

江戸だけでなく、大阪の書店にも版木を買われて、幕末まで刷り出されていたそうで、その人気の程が伺えます。

『田舎荘子』に所収の「猫之妙術」は、老猫に武術の奥義を尋ねる剣術談義で、この篇のみ抜き出し、一種の武術書として300年経た現在